

いやがらせの思想：「ベトナムに平和を！」 神戸行動委員会の経験

黒川, 伊織 / Kurokawa, Iori

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

697

(開始ページ / Start Page)

16

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2016-11-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013469>

いやがらせの思想

——「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会の経験

黒川 伊織

はじめに

- 1 神戸大学御影分校の日々
 - 2 ベトナム反戦に立つ
 - 3 大学闘争の嵐のなかで
- おわりに

はじめに

1968年6月15日土曜日の夕刻、兵庫県庁となりの生田公会堂で開かれた「ベトナム⁽¹⁾反戦6月行動神戸連帯集会」には、250人の市民が集まった⁽²⁾。壇上には、このとき48歳の小島輝正と、26歳の齊藤威が立っていた。1965年4月6日夕方、神戸アメリカ領事館前で抗議の座り込みを行ったことをきっかけに生まれた「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会の活動を一手に担い続けてきた小島と齊藤にとって、これほど多くの市民が集まったのは、後にも先にもただ一度の経験だった。医学部全学闘争委員会により東京大学安田講堂が占拠されたこの日は、国会前で樺美智子が命を落とした日から、ちょうど8年を迎える日であった。60年安保闘争と「1968年」の〈叛乱〉に枠づけられた1960年代を象徴する「1968年6月15日」の生田公会堂で、ふたりは大勢の参加者とともに“We Shall Overcome”^(編注)を歌った。しかしながら、「我々が“We Shall Overcome”と歌うのは、ことばに浮かれて伊達に歌っているのではないはずなのだ」⁽³⁾と記す小島も、「“We Shall Overcome”で済むものかと思ったな」と振り返る齊藤も、あくまで冷静であった。

1960年代後半に社会運動が高揚した背景の解明を求める本特集に、本稿は1960年代の地域の運動経験から応答したい。その手がかりとして、本稿では仏文学者・小島輝正（1920-87年、神戸大学教養部名誉教授）と物理学者・齊藤威（1942年生、元東京大学宇宙線研究所助手）の1960年代

(1) 当時の史料に即すると、「ベトナム」「ヴェトナム」の両表記が混在するが、本稿では「ベトナム」に統一している。

(2) 「行動日誌」『ベトナム通信』（「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会）30号、1968年7月1日。

(編注) 邦題は「勝利を我らに」。元は賛美歌。アメリカのフォーク歌手で、反戦などの社会運動でも知られたピート・シーガーが、1960年代の公民権運動を象徴する歌として広めた。

(3) 小島輝正「いやがらせの思想」『ベトナム通信』24号、1967年12月1日。

の経験に着目する。小島と齊藤は、1960年代前半に神戸大学消費生活協同組合（以下、神戸大学生協）の理事を務め、1965年にアメリカ軍による北ベトナム爆撃（北爆）がはじまると、ベトナム戦争の日本国内最前線の地のひとつとなった神戸で「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会（以下、神戸行動委員会）を組織し、地域で粘り強く反戦運動を続けた。

本稿がこのふたりの個人的経験に注目する理由は、2つある。1つ目は、ふたりが経験した1960年代のさまざまな社会運動——大学生協運動・原水爆禁止運動・ベトナム反戦運動など——の経験を踏まえることで、「1968年」の〈叛乱〉に至る思想・運動の脈絡を明らかにできることである。本稿は、「1968年」の〈叛乱〉を、いわゆる全共闘世代固有の経験に切り縮めることなく、その前後の世代——とりわけ先行する世代——にも共有された経験として捉えなおそうと試みる。先行する世代の運動経験を引き継ぎつつ、次の世代の運動が生まれるという社会運動における世代間継承の具体的関係を「1968年」について明らかにしようとするとき、ふたりの経験がきわめて示唆に富んでいることは、後述する通りである⁽⁴⁾。

2つ目は、突出した学生の動きや中央の一握りの知識人の経験に偏って論じられがちであった「1968年」の〈叛乱〉⁽⁵⁾を、神戸という地の歴史的経験のうちに位置づけることで、東京を中心として論じられがちな「1968年」の経験の多様性を明らかにできることである。本稿は、パリ5月革命に象徴されるグローバルな社会変革の動きのなかに日本の「1968年」の〈叛乱〉を位置づける近年の研究動向⁽⁶⁾に対して、地域社会のミクロな運動経験における「1968年」の〈叛乱〉の歴史的意義を明らかにしようと試みるが、そのような試みに対してふたりの経験はきわめて貴重な手がかりを提供してくれるのである。

以上のような関心に立つ筆者は、「1968年」に至る運動経験の系譜を踏まえる作業、そして「1968年」の経験がその後に残したものを見通す作業なしに、「1968年」の経験を十全に位置づけることはできないと考えている。本稿では、ふたりの出会い（第1節）、ベトナム反戦運動の経験（第2節）、大学闘争での苦闘（第3節）を跡づけ、最後にふたりにとっての「1968年」のその後を考えていく。長時間の聞き取りに応じてくださった齊藤氏をはじめ、ご協力くださった直原弘道、水戸喜世子、宮田剛、小寺山康雄、真砂卓三、中村哲夫、谷川昭、西信夫、髯本郁の各氏、そして故・山崎洋祐氏に感謝申し上げます。また、史料閲覧の便宜を図ってくださった神戸大学大学文

(4) 拙稿「朝鮮戦争・ベトナム戦争と文化／政治——戦後神戸の運動経験に即して」（『同時代史研究』7号、2014年12月）では、敗戦直後の戦後文化運動の経験がベトナム反戦運動の思想的・人的前提となっていることを、神戸の運動経験の聞き取りから明らかにした。

(5) たとえば、ベ平連運動の経験を語る際、東京ベ平連の事務局長を務めた吉川勇一（1931-2015年）の回想が、第一に参照される歴史の語りとなっている。吉川の没後、高草木光一ほか『ベ平連と市民運動の現在——吉川勇一が遺したもの』（花伝社、2015年）が刊行され、吉川についての再検討がなされようとしている。平井一臣の問題提起（『戦後社会運動のなかのベ平連』『法政研究』71巻4号、2005年3月）以来、各地域に叢生したベ平連（地域ベ平連）運動への関心が高まっており、当事者・研究者によって「地域ベ平連研究会」も組織されている。大学闘争については、小熊英二『1968』（上）（下）（新曜社、2009年）が歴史研究の立場から各大学の闘争を跡づけた。ベトナム反戦運動と東大闘争については、東大全共闘議長・山本義隆（1940年生）の回想録（『私の1960年代』金曜日、2015年）が刊行されている。

(6) 油井大三郎編『越境する1960年代』（彩流社、2012年）、西田慎・梅崎透『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」——世界が揺れた転換点』（法律文化社、2015年）など。

書室，立教大学共生社会研究センターに感謝申し上げます。

1 神戸大学御影分校の日々

小島と齊藤が出会った神戸大学御影分校は，1949年に発足した新制神戸大学のなかでも，教官と学生の距離が最も近かった。「神大民主主義」「オール神大」と当事者に回想されるこのような密接な関係は，「1968年」に至るまで神戸大学の学生運動を特徴づけていくことになる。

神戸にやってくるまで

親子ほど年の離れた小島と齊藤は，不思議と馬があったと齊藤は語る。そして，誰もが小島の齊藤への信頼の厚さを思い起こす。ふたりに共通する経験は，敗戦後の引き揚げ，そして転居により神戸にやってきたことだ。

1920年1月，札幌に生まれた小島輝正は，大蔵官僚の父の転勤に伴って仙台・広島・大阪と居を移す幼年期を過ごした⁽⁷⁾。12歳で入学した東京府立高校（尋常科・高等科）で培われた人間関係は，終生の小島の支えとなる。文学好きが高じた小島は，19歳で東京帝国大学文学部仏文科に入学し，渡辺一夫に師事した。東大時代に親しくなった戸田政雄（独文），浜田泰佑（仏文）とはのちに神戸大学で同僚となり，小川正巳（独文），岸本通夫（仏文）とは神戸での文学活動をともにすることになる。

1941年12月，徴兵検査を受けた小島は第二乙種に合格した。真珠湾攻撃が起きたのはその1週間後のことだった。月末には繰り上げ措置により大学を卒業し，翌年11月に神戸港を出港して南洋貿易会仏印出張所での勤務についた。敗戦後の収容所生活を経て，1946年5月に辛くも焼け残った東京・牛込の自宅に帰り着いた。

帰国後，編集者として戦後の出版ブームの一端を担った小島は，出版労組に関わり，共産党に入党して日本民主主義文化連盟の活動にも関わった⁽⁸⁾。1950年9月，出版ブームが衰退して生活に窮した小島は，1949年に発足したばかりの新制神戸大学文理学部にフランス語教師として着任し，定年退官まで神戸大学で教鞭を執ることになる。小松攝郎レッド・ページ問題で揺れる神戸大学に共産党員の小島が着任したのは，もちろん黨員であることを伏してのことだった⁽⁹⁾。神戸に移り住んだ小島は，講義のかたわらアラゴン『レ・コミュニスト』の日本語訳を完成させる一方，作家・富士正晴が主宰する同人雑誌『VIKING』などで文学評論を行い，教育・研究と文学活動を両立させていった。

大蔵官僚の父の任地・台湾で1942年1月に生まれた齊藤も，引き揚げ後は父の転勤に従い高松など各地に転居を繰り返した。齊藤は，1952年に移ってきた神戸市東灘区で大学までを過ごすことになる。官吏の家庭に育った齊藤が，社会のなかの格差の存在に気付く原体験となったのが，高

(7) 「小島輝正自筆年譜」『樹林』（大阪文学学校）263号，1987年8月（以下，小島の経歴についてはこの「自筆年譜」に拠る）。

(8) 杉浦明平「思い出」『たうろす』56号，1987年。

(9) 小島輝正『小島輝正の自画像』神戸新聞出版センター，1987年。

松の官舎の近くにあった豚小屋だった。のちに神戸アメリカ領事館前で座り込みを続けた時、向かいの「スラム」の住民と親しくなるには、この高松での原体験が大きく影響していくことになる。

神戸大学御影分校

姫路分校（旧制姫路高校の校地を使用）と御影分校（旧制兵庫師範学校の校地を使用）にわかれた神戸大学の教養課程のうち、御影分校は「清新自由の気にあふれて」⁽¹⁰⁾いた。文学部・理学部・教養課程が狭いキャンパス内に同居する御影分校では教官と学生の距離が極めて近く、両者の間に親密な関係が生まれた。このような御影分校の立地的特性に加え、新入生がそれぞれ教養課程の各教官のもとに集まり10～15人程度のグループを作る「G制度」という神戸大学の教養課程独特の制度は、教養課程の教官と学生の距離をより縮めた。

兵庫県立神戸高校を卒業後、1年の浪人生活を経て神戸大学理学部に入学した齊藤は、御影分校で教養課程（ジュニア）を履修した。G制度のもとで齊藤が師事した教官は、論理学担当の田口寛治（1923-88年）である。高校の担任制とも似て異なるG制度は、教官と学生がさまざまな議論を交わす絶好の場であり、シニアに進学してからも、さらには卒業してからも教官と学生の親しい関係は長く続いた。「そんなこともあるよ」という田口の口癖は、齊藤がその後さまざまな運動に関わっていくうえでの座右の銘となる。

小島は補導委員として、齊藤は浪人生として、それぞれ60年安保闘争を経験していた。小島が親しく付き合った神戸大学学生自治会は全学連反主流派であり、その多くが共産党内の構造改革派を支持していた。1961年8月、共産党第8回大会で山田六左衛門ら構造改革派が除名されたのち、共産党神戸大学学生細胞も共産党からの離党声明を公表した⁽¹¹⁾。これ以降神戸大学の学生自治会をはじめ学生運動の文脈では、統一社会主義同盟（1962年結成）の学生組織であるフロントが主導権を握ることになる。神戸大学着任以来秘密黨員として過ごしてきた小島もこのとき共産党を離れ⁽¹²⁾、統一社会主義同盟の支援を続けた。

共産党との関係如何で教官と学生の仲がこじれるということも、この時期の神戸大学ではあまりなかった。齊藤は、同じ官舎に暮らしていた経済学部助教授（当時）・置塩信雄（1927-2003年）の自宅に出入りして『資本論』を学んだが、共産党を支持する置塩が党派的発言をすることはなかったという。共産党を離党した学生も、離党後も置塩のもとにしばしば相談に訪れたといい⁽¹³⁾、教官も学生も党派性を押し出すよりも、むしろ「オール神大」として全学的運動を協調して進めることに重きをおいていた⁽¹⁴⁾。「オール神大」という立場は、大学闘争が激化するまで神戸大学の運動を特徴づけていく。

(10) 小島輝正「非教育的教師の弁」『神戸新聞』1983年2月19日（小島輝正『始めからそこにいる人々』編集工房ノア、2000年所収）。

(11) 日本共産党神戸大学学生細胞「社会主義への前進をめざして（1961年8月14日）」『資料 戦後学生運動』第6巻、三一書房、1970年所収。

(12) 直原弘道「青春としての文学／小島輝正の予感」『驪路』8号、1989年。

(13) 1961年当時御影分校自治委員を務めた中村哲夫（1941年生、神戸大学文学部）による。

(14) 当時の『神戸大学新聞』を見ると、学長選考規定問題をはじめ、教職員組合と学生自治会の共闘が常であったことがよくわかる。

1962年5月、神戸大学生協の人事改選が行われた⁽¹⁵⁾。理事長に選出された小島、組織部学生理事に選出された齊藤の関係は、ここから深まっていく⁽¹⁶⁾。当時の神戸大学の学生運動を牽引した学生自治会・総合雑誌『展望』編集部⁽¹⁷⁾・大学生協の各組織のなかで、フロントをはじめとする党派とはそれぞれ等間隔の距離を置こうとした齊藤⁽¹⁸⁾が大学生協に入ったのは、総評に象徴される「労働点での運動」に対し、「消費点での運動」に可能性を見出したからだった。齊藤とともに学生理事に選出された谷川昭（1942年生、神戸大学教育学部）は、大学生協が共同仕入れを実施していたため、共同行動を保つ必要から、学生運動の政治的分裂が大学生協運動に直接持ち込まれることはほとんどなかったと回想する。学生の多様な消費への要求をすくいあげながら大衆的行動を組織する大学生協運動の経験は、のちに齊藤がベトナム反戦運動を担っていくうえでの糧となった。

生協店舗の移転統合問題⁽¹⁹⁾などで財政的困難を抱えていた当時の神戸大学生協が直面した難題は、賃上げを求める生協従業員労組との関係だった。生協食堂の従業員などで構成される生協従業員労組はユニオン・ショップ制をとっており⁽²⁰⁾、約50人の従業員のなかには小島と文学活動で縁の深かった詩人・赤松徳治⁽²¹⁾（1935-2011年）がいた。当時『新日本文学』を読んでいた齊藤と、ロシア文学の翻訳にも携わった赤松は終生の友となるが、こと賃上げ要求については、赤松ら生協従業員労組は強硬な立場を貫き、毎年労使交渉は難航していた。1964年の一時金支給金額をめぐることは、生協従業員労組がストライキを決行し、生協食堂を封鎖する事態に陥った。1週間に及んだストライキは、給与1カ月分の一時金増額決定により解除となった。

この経験から齊藤は、封鎖という手段に違和感を覚えることになった。生協従業員労組を代表して労使交渉を行った赤松は、常に封鎖からの撤退を念頭に置きつつ、交渉の場——それは大学に近い水道筋の飲み屋であったりしたが——に立った。当時の赤松の発言——「撤退を考えて封鎖した」「（組合の）仲間に説明できる落としどころを考えてよ」——からは、労使間に厚い信頼関係が構築されていたからこそ、互いの立場を思いやりつつ、封鎖解除を交渉の条件にできた状況が読み取れる。しかし、生協と生協従業員労組の関係は、資本家と労働者の対立関係に収斂できるものではない。組合員に選出された生協理事は、生協組合員の総意を受けて生協の運営を行っているに過ぎないからだ。その限りで、生協理事は資本家の立場にはなく、生協理事と生協従業員労組の交渉

(15) 「新理事決定」『こうべ Univ. 生協ニュース』20号、1962年6月22日。

(16) 谷川昭によると、当時の学生理事の月給は6,500円だった。同年の大卒初任給は17,000円強である。

(17) 1960年に創刊された『展望』は、神戸大学の学生が編集する学内総合雑誌である。顧問には小島や陸井四郎ら教官が就任した。初期の誌面は、佐藤昇ら構造改革派の論客の名が目立つように、事実上関西のフロントの理論誌的役割も果たした。1976年刊行の22号まで、神戸大学大学図書蔵。

(18) 齊藤自身は「統一社会主義同盟から同盟員として認識されていたかもしれない」というが、当時の統一社会主義同盟神戸大学支部が書面により正式な加入手続を行うことはなく、小寺山康雄（1941年生、神戸大学文学部）は「同盟費を払っていれば同盟員だ」と認識していたという。したがって、齊藤が同盟員であったかどうかは、はっきりしない。

(19) 当時の神戸大学は6ヶ所に校地が分散するたこ足大学であり、1958年に米軍より返還された六甲ハイツの跡地を利用して六甲台周辺に校地を統合移転しようとしていた。

(20) 「生協に労組生まれる」『神戸大学新聞』513号、1961年1月20日。

(21) 神戸市立外国語大学卒業、詩集に『赤松徳治詩集』（新・日本現代詩文庫、土曜美術社出版販売、2011年）など。

を「資本家＝敵」とする古典的な階級対立に還元することはできない。齊藤にとっても生協は「俺の資本ではな」かった。ならば、生協従業員労組にとっての「敵」は誰なのか。「敵は誰なのか」「何のための封鎖か」——生協ストライキの経験から齊藤が感じ取った疑問は、のちの大学闘争のなかで思い起こされていくことになる。

「すべての国の核」に反対する

1962年の後期から専門課程（シニア）に進んだ齊藤は、物理学科の皆川理研究室に入った。原子核研究を専門とする皆川理（1908-94年）は、GHQにより原子核関連研究禁止命令が出されると、宇宙線の観測・研究に乗り出し⁽²²⁾、1950年に神戸大学に着任してからも日本の宇宙線研究のリーダーとして大きな力をもった。

1963年1月、アメリカ政府が原子力潜水艦の日本寄港受け入れを日本政府に要求したとき、湯川秀樹ら物理学者はただちに反対声明を発表し、これを受けて日本学術会議も原子力潜水艦寄港反対を表明した。物理学者がいち早く原子力潜水艦の寄港に反対したのは、戦時中の原爆開発の経験があったことだった。戦時中、仁科芳雄らが軍部の意向を受けて原爆開発に取り組んだことはよく知られている。その仁科は、原爆投下直後の広島に入り、感光したレントゲンフィルムから投下された爆弾が原爆であると断定した。「軍事利用」による破壊の実態を熟知していた物理学者の多くは、広島・長崎への原爆投下を止め得なかった科学者としての悔恨を抱えこんでいたがために、原子力潜水艦の寄港に真っ向から反対したので。

神戸港の第6突堤がアメリカ軍に接収されていた神戸では、原子力潜水艦の寄港が予想されたこともあり、神戸大学学生自治会・大学生協を中心に原子力潜水艦寄港阻止闘争が展開された。原爆投下1カ月後の長崎に調査に入った経験をもつ皆川も⁽²³⁾、元神戸大学学長・古林喜楽らとともに「原子力潜水艦寄港反対声明」を発している⁽²⁴⁾。小島の原子力潜水艦寄港阻止闘争への具体的関わりは、今のところ確認できない。しかし、すぐ上の姉が広島で被爆死して遺骨すら見つからなかったことに小島が強い哀しみを抱いていたことから⁽²⁵⁾、小島が「軍事利用」反対の立場にあったことは容易に推察できる。小島は1959年の、齊藤は部分的核実験停止条約の批准をめぐる分裂開催となった1963年の原水爆禁止世界大会にそれぞれ参加している。アメリカの核実験だけではなく、ソ連の核実験にも中国の核実験にも反対したふたりは、党派の介入による原水禁運動の分裂を厳しく批判する立場をとっていた。

原子力の「軍事利用」には激しい拒否反応を示した日本の世論であるが、1955年に施行された原子力基本法により、原子力の「平和利用」すなわち原子力発電の推進が国策とされた。1967年3月に神戸大学大学院理学研究科修士課程の修了を予定していた齊藤は、東芝に入社して原子力発電

(22) 福井崇時「戦後の宇宙線研究再開とCRC（宇宙線研究者会議）結成の経緯」『名大宇宙線研究室記事』47巻1号、2005年。

(23) 藤岡伍郎「皆川理先生との半世紀」皆川理先生追想録編集委員会編『追想録 皆川理先生と宇宙線』私家版、1995年所収。

(24) 「まず学内に“渦”を 兵庫県大学教授連合集会」『神戸大学新聞』585号、1964年10月28日。

(25) 小島輝正「私とヒロシマ」『SUNDAY EXPO』1966年8月7日、注(10)所収。

事業に従事するよう皆川から強く勧められた。原子力発電は発電によって得られるエネルギー以上に冷却水として用いられる海水を温めることにエネルギーを浪費するのであり、齊藤はこれを「原子力でお湯を沸かすのは高くつく」と表現して原子力発電の有用性を否定し、東芝への入社を断ることになる。

のちに原子力発電を「海温め装置」と喝破した物理学者・水戸巖（1933-86年）は、1961年に甲南大学に着任していた⁽²⁶⁾。時折皆川研究室を訪れる水戸と齊藤は、顔見知りの間柄となった。偶然にも、水戸は小島と同じく公団岡本梅林住宅（神戸市東灘区）に暮らしており、1964年には公団からの一方的な家賃値上げ通告に抗議する法廷闘争をともに行ってもいた⁽²⁷⁾。小島と水戸、そして齊藤が神戸アメリカ領事館前に集結してベトナム反戦運動に立ち上がる日は、すぐそこまで近づいていた。

2 ベトナム反戦に立つ

神戸アメリカ領事館前での抗議の座り込みに加わった小島と齊藤は、「ふつうの市民」による反戦グループである「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会を生み出した。のちに小島が「「ベ平連」の支部でも下部組織でもない」⁽²⁸⁾と自負することになる神戸行動委員会の3年半の歩みを確認しておこう⁽²⁹⁾。

70日間連続神戸アメリカ領事館前座り込み

1965年2月にアメリカ軍が再開した北爆への抗議の声は、世界中でひろがっていた。1965年4月6日午後、統一社会主義同盟の同盟員である真砂卓三（1941年生、神戸市立外国語大学）と山崎洋祐（1942-2014年、関西学院大学）は、「アメリカはベトナムから手を引け」「平和のために立ち上がろう」などと大書した手製のプラカードを掲げて、三宮の外れにある神戸アメリカ領事館前で座り込みをはじめた⁽³⁰⁾。彼らの行動に同調する神戸大学の同盟員も座り込みに合流し⁽³¹⁾、夜を徹して座り込みを続けた。座り込みは翌朝の新聞・テレビでも報道され、領事館前には続々と座り込みに加わる人が集まってきた。水戸巖、そして水戸からの急報でやってきた齊藤もそこにいた。

(26) 1966年9月に日本物理学会の主催により開催された第8回半導体国際会議にアメリカ軍から8,000ドルの資金が提供されていたことが、翌年5月に明らかとなった。1967年9月に開催された日本物理学会第33回臨時総会で、水戸巖・山本義隆らはこの資金供与の責任を追及し（注（5）前掲山本参照）、日本物理学会は、「日本物理学会は今後内外を問わず、一切の軍隊から援助、その他一切の協力関係をもたない」という決議を採択した。

(27) 「“お手盛り”への批判を——梅林住宅民の闘争が好例」『神戸大学新聞』587号、1964年11月26日。

(28) 注（7）に同じ。

(29) 神戸アメリカ領事館前での座り込み、神戸行動委員会の発足の経緯については、拙稿「神戸港は南シナ海に通じ、太平洋西岸に通じる——北爆50年の2015年夏、集团的自衛権反対デモの現場から」（『アリーナ』19号別冊、2015年11月）も参照。

(30) 「戦争なんて…僕らはイヤだ」『兵庫新聞』1965年4月8日（夕刊紙のため7日発行）「並み木道」『神戸新聞』1965年4月7日。

(31) 「米領事館に座りこむ 神戸市民が徹夜で抗議」『平和と社会主義』（統一社会主義同盟全国機関紙）42号、1965年4月8日。

「神戸市民の有志」と名乗る座り込みの輪は、7日夕方には真砂・山崎・齊藤を含め17人になった。7日午後8時、道路交通法違反容疑でこの17人が現行犯逮捕され、所轄の兵庫県警生田署に連行された。齊藤にとって、最初で最後の逮捕の経験である。東京ベ平連による抗議デモに先立つこの座り込みの経験が、その後10年近く続く神戸のベトナム反戦運動のはじまりとなった。戦時下の仏印で暮らした経験から、北爆を「よその国のことと思えなかった」⁽³²⁾ 小島も⁽³³⁾、座り込みの輪に加わった。

座り込みグループは、60年安保闘争の際に誕生した「声なき声神戸市民の会」と合流して⁽³⁴⁾、6月・8月と「ベトナムに平和を！」神戸集会を開いた。しかし、連日続く北爆の報道に慣れきってしまったことで、ベトナム戦争の市民の反戦意識が薄まりつつあると感じた小島らは、9月18日から領事館前で座り込みを再開して、ベトナム反戦運動への市民の関心を喚起しようと考えた⁽³⁵⁾。統一社会主義同盟の関係者、小島と親しい神戸の詩人たち、そして神戸大学・甲南大学・関西学院大学の教員・学生・卒業生を担い手として、70日間連続領事館前座り込みがはじまった⁽³⁶⁾。

領事館の向かいに暮らす「スラム」の住民のことを、齊藤は今も忘れていない。神戸空襲（1945年6月）により灰燼と化した三宮の旧居留地の端に、空襲直後から人びとが住み着いたバラック建の民家の集まりは、近代的なビルが立ち並ぶ神戸の中心地で、ひときわ異質な空間だった。8月の「ベトナムに平和を！」神戸集会に参加した詩人・和田英子は、「海に近いアメリカ領事館の建物と対象的な附近のバラック建の裸電球」⁽³⁷⁾と、モダニズム建築の領事館と「スラム」が向かい合う光景を切りとっている。その「スラム」の住民の多くが、「よせや」や日雇い労働で生計を立てており、日本人だけではなく在日コリアンの住民も多く暮らしていた。警察による脅しや強制排除に抗しながら、日頃から「なんやかんやとえらそうな」⁽³⁸⁾ 領事館の前で、連日座り込みを続ける座り込みグループの姿に、「スラム」の住民は、圧倒的な権力に素手で立ち向かおうとする座り込みグループの強い意志をはっきりと感じ取った。「私はしががないスラムの住民ですが、戦争には反対です」⁽³⁹⁾と話しかけてくる男性、齊藤が作ったプラカードをもち、領事館に石を投げつける子どもたち⁽⁴⁰⁾。「スラム」の住民は、座り込みグループを自分たちのなかまとして受け入れた。朝食のパン

(32) 注(9)に同じ。

(33) 小島は1961年に日本ベトナム友好協会神戸支部長に就任し、1962年秋までこれを務めた。

(34) 声なき声神戸市民の会については、高木伸夫「君本昌久の戦後——「市民」像との格闘について」(『歴史と神戸』290号、2012年2月)参照。

(35) 水戸巖「神戸通信」『声なき声のたより』36号、1965年10月10日。

(36) 「花時計」『神戸新聞』1965年9月19日。なお、神戸での統一社会主義同盟の影響力は大阪と比べると大きくなかった。最初に座り込んだ同盟員の真砂卓三は、大阪での運動に力点を置き、関西ベ平連の前身となる「ベトナムに平和を！」大阪行動委員会を組織したし、大阪の統一社会主義同盟は総評の影響下にある大阪軍縮協の加盟団体としてベトナム反戦運動にとり組んでいた。神戸で統一社会主義同盟の影響が相対的に小さかったことは、神戸行動委員会の活動を「市民」の運動として成立させる重要な前提であったように思われる。

(37) 和田英子「8月15日の夜明け——「ベトナムに平和を」徹夜デモ参加の記」『研究資料』(現代詩神戸研究会)73号、1965年10月。

(38) 「座り込みノート」1965年10月1日付、水戸喜世子氏蔵。

(39) 同前「座り込みノート」1965年10月5日付。

(40) 同前「座り込みノート」1965年9月26日付。

やコーヒー牛乳、はたまたジュースに日本酒と、「スラム」の住民は毎日のように飲食物を座り込みグループのためにもってきてくれた。「肩書きをとればみんなひとりの市民だ」と小島が語っていたことを齊藤は記憶するが、豊かとはいえない暮らしのなかで、自らの意志で運動を助けた「スラム」の住民は、まさに「ひとりの市民」であった。

「ひとりの市民」として生きる「スラム」の住民と向き合ったことは、目前に迫った日韓基本条約の批准に反対する運動に座り込みグループが主体的に関わるひとつの契機ともなっただろう。ベトナム反戦運動から日韓条約反対運動への展開を準備したのは、次に引くように、齊藤が指摘した「加害者」としての日本人という発想である。

「戦争にまきこまれる」といった被害者的発想はのり超えられるべきである。40年にわたる植民地支配にあたって、日本人の一人一人が抑圧民族の一員であったこと、今またなりつつあることに対し、厳しい反省を、我々自身もふくめ人々に鋭くつきつける、思想的斗いでなければならぬ⁽⁴¹⁾。

この齊藤の問題提起に対しては、座り込みグループからも異論が出て、日韓基本条約批准反対運動に関わったことで座り込みグループから離れた人もいた。しかし、「加害者」の責任を自覚した座り込みグループは、世界の反戦運動との連携を視野に入れて活動を展開していったのである。

神戸港から見た世界

生前の山崎洋祐は、アメリカの学生運動や公民権運動の高揚に触発されて「オモロい運動がしたかったんや」と座り込みをはじめた理由を語った。関西弁の「オモロい」は、たんに「面白い」というだけではなく、そこに込められた創意工夫を肯定的に評価する語感をともなう。山崎のいう「オモロい」運動は、従来型の平和運動が抱え込む一国的枠組を踏み越えて、世界の反戦運動との連携を実現しようとするものだった。

実際、領事館前に座り込んでいると、領事館を訪れるアメリカ人とベトナム戦争についての議論を交わす機会がしばしばあった。ただ“Right!”とやって通り過ぎる女性⁽⁴²⁾、“We seek for solidarity of American people and Japanese people to oppose Vietnam War”と訴えたら、“I understand”と返してきた老婦人など⁽⁴³⁾、水戸喜世子が保管する「座り込みノート」を見る限り、概して女性の方がベトナム反戦運動に好意的な反応をしている。一方で、ベトナムの戦地から帰ってきた男性は、ベトナムで自らの身体に受けた傷を座り込みグループに見せながら、“As long as there is Communism in the world there will be no peace”と、北ベトナムの打倒は共産主義の脅威から世界を守るための正当な手段であると主張する⁽⁴⁴⁾。

神戸にアメリカ領事館が長く置かれていたのは、神戸港が戦前以来アジア最大の貿易港として機

(41) 『9・10・11月行動委員会通信』No.5, 1965年11月5日。

(42) 注(38)「座り込みノート」1965年9月27日。

(43) 注(38)「座り込みノート」1965年9月20日。

(44) 注(38)「座り込みノート」1965年10月6日。

能し、1945年9月にアメリカ軍が進駐してからは、神戸港・神戸市街地の多くをアメリカ軍が接收し、軍民ともに多くのアメリカ人が暮らしていたためだ。朝鮮戦争が勃発すると、神戸港からは多くの兵員・兵站物資が朝鮮の戦場に送られ、神戸の街はアメリカ兵の落とす金で潤った。通りすがりに座り込みに加わったタクシー運転手の男性は、「金を持って行ったってどうせ死ぬのだから」と神戸で全財産を使い果たして朝鮮へと送られた黒人兵との出会いを思い出していた⁽⁴⁵⁾。小島の友人のなかには、朝鮮戦争に対する反戦ビラを配って警察に追われた経験をもつ者もいた⁽⁴⁶⁾。

1952年に占領が終わると、接收物件の多くは順次日本に返還されたが、神戸港の第6突堤はベトナム戦争が終結する直前の1974年までアメリカ軍に接收されており、ベトナム戦争中も、多くのアメリカ軍の艦船が出入りしていた。その限りで、神戸は朝鮮戦争、そしてベトナム戦争における日本最前線の地のひとつ

であった。神戸の街が抱え込むこの特性は、座り込みグループ、そして70日間連続座り込みの終了後、神戸大学教養部小島研究室を事務所として発足した神戸行動委員会の活動を方向付ける重要な前提となる。

神戸行動委員会は、アメリカ・パークレーのVietnam Day Committeeとも連絡をとり、太平洋を越えた共同行動を模索した⁽⁴⁷⁾。ラッセルとサルトルを中心とする、ベトナムにおけるアメリカの戦争犯罪を裁く「国際戦争犯罪法廷」とも連絡をもった⁽⁴⁸⁾。クリスマスには、神戸港に上陸するアメリカ兵に反戦クリスマスカードを配った⁽⁴⁹⁾。ベトナムから戻ってきたアメリカ軍の飛行機の修理工場への抗議行動も続けた。1967年の10月に「イントレピッドの4人」が脱走してからは、齊藤

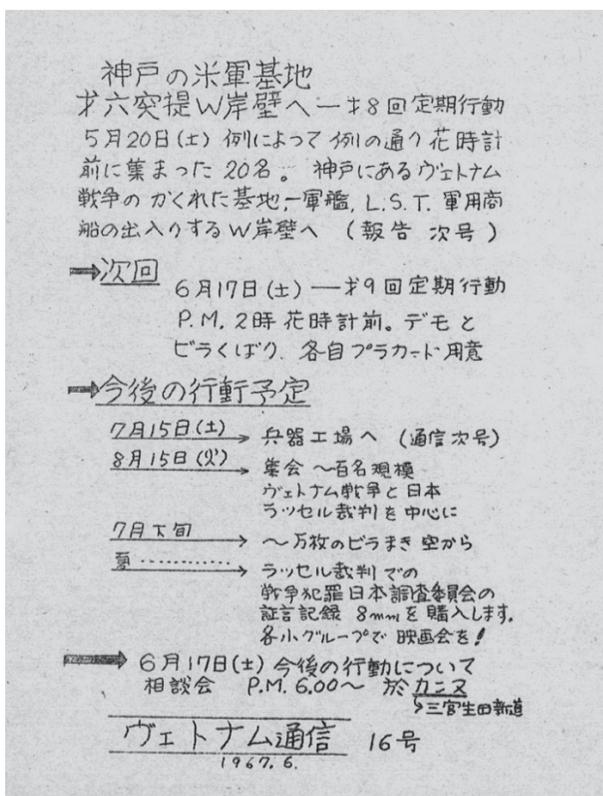


図1

神戸港第6突堤・新明和工業への抗議デモを呼びかける『ベトナム通信』16号(1967年6月)、ガリを切ったのは齊藤である(齊本郁氏提供)

(45) 注(38)「座り込みノート」1965年9月26日付。

(46) 拙稿「新日本文学会神戸支部と朝鮮戦争——詩人・直原弘道とその時代」『社会文学』42号、2015年8月。

(47) 『「ベトナムに平和を！」神戸集会行動委員会 緊急通信』1965年12月。

(48) 『ベトナム通信』24号、1967年12月1日。

(49) 同前。

は小島の関係で引き受けた脱走兵の世話もした⁽⁵⁰⁾。脱走兵を連れて齊藤が三宮で出くわした顔なじみの生田署の警官が、「今日俺は非番だから」とつぶやいてその場を立ち去ったことを齊藤は記憶する。このような日常的行為の積み重ねにどう意味を見出すのか、小島は「行為が思想を分泌する」⁽⁵¹⁾と表現する。それぞれがやりたい行為・やるべき行為に取り組むことが、神戸行動委員会の誇りだった。そして、それらの実務のほとんどは、齊藤ひとりの肩にのしかかった。

3年半の神戸行動委員会の活動のなかで、反戦運動が本当にベトナム戦争を止める力となるのか、参加者から疑問が呈されることもあった。これへの小島の答えは、現在のさまざまな社会運動も参照し得る明快かつ優れたもので、今読み返しても示唆に富む。小島の没後に刊行された著作集などにも収められていない幻のこの一文を、次に引用しておく⁽⁵²⁾。

我々がプラカードを持って町に立ち、町を歩き、軍需工場の前をうろつくことが、戦争遂行者やその協力者にとって、歓迎すべきことではなく、眼ざわりなことであり、「いや」なことであるかぎり、我々はそれをするべきなのである。我々の敵にとって、我々の存在が眼の前から消えてなくなることが望ましい場合、我々は消えてなくなるべきではないのである。我々は小蠅のように、つねに、敵の鼻先でちらちらし、羽音をたてているべきなのである。

事実として、我々は孤立していない。日本だけではなく、世界のいたるところに小蠅たちがいる。ペンタゴンを何よりもいらいらさせているのが、世界をつつんでいるその小蠅たちの羽音であることはまちがいない。我々は、その全世界的な「いやがらせ」闘争の日本の神戸という町における一環を担当しているのである。我々がここでそれをやめれば、ここでその円環は切れるだろう。我々はその仕事を放棄するわけにはいかない。それは、きわめて現実的で、かつ有効な仕事である。ワシントンのペンタゴン前に集った十数万のアメリカ反戦者たちも、その円環の存在を知っていただろう。知っていたからこそ彼らは集ったのだろう。

この一文は「いやがらせの思想」と題されている。ひとつひとつの力が微力で、「少数者」として地域で孤立していたとしても、我々は世界の反戦運動の「一環」を担っているのだという小島の励まし——それは自らの行動への励ましでもあっただろう——は、神戸行動委員会の人びとの胸に響いた。「少数者」としての矜持を胸に、それぞれの場所で「いやがらせ」闘争を担うこと、この精神は、神戸行動委員会の人びとに共有されていく。

のちに小島は、神戸大学を定年退官（1984年3月）したのを機に自らの歩みを振り返っており、神戸行動委員会の運動については、「だれかに笛を吹かれて踊った踊りではなく、私自身の意志で踊った踊りだった」⁽⁵³⁾と総括している。そして、「いわゆる「ベ平連」の支部や下部組織になった

(50) 齊藤によると、白人の脱走兵は神戸・御影の個人宅で数日間匿われていた。家業の運送店を継いでいた山崎洋祐が運転する車に脱走兵を乗せ、齊藤と小田実（1968年4月に大阪の桃山学院大学に専任講師として着任した）が同乗して阪神国道を走り、大阪の次の支援者のもとに脱走兵を送り届けたということである。

(51) 小島輝正「場所と銃向」『ベトナム通信』25号、1968年1月。

(52) 注(3)に同じ。

(53) 注(9)に同じ。

ことはない」⁽⁵⁴⁾と強調してもいる。この点は、神戸行動委員会の位置づけを考えるうえで重要である。

ベトナム戦争当時、神戸行動委員会は、各地で展開されていたさまざまなベトナム反戦運動と、ゆるやかに連携していた。東京ベ平連とも、さまざまなベトナム反戦運動のひとつとしての限りにおいて、ゆるやかに連携していたとよい。同時代においては、ベトナム反戦運動はそのような多元性を持っていたし、神戸行動委員会はそのような多元的つながりのなかで独自に活動していたのである。

しかし、1973年1月に和平協定が調印され、1974年1月に東京ベ平連が解散し、すぐさま『資料・「ベ平連」運動』全3巻（「ベトナムに平和を！」市民連合編、河出書房新社、1974年）が編集刊行されるといったかたちでベトナム反戦運動の歴史化が始まると、上述したような同時代の多元性は急速に見失われていったように思われる。1980年代なかばの時点で小島が表明したのは、東京ベ平連を中心に据えてベトナム反戦運動を捉えることに対する違和感である。実際、神戸行動委員会の運動は自立性と独自性をもって展開されていたし、同時代のベトナム反戦運動の空間はそのような自立性と独自性をもった個々の運動によって多元的に担われていた。これまで顧みられることのなかった神戸行動委員会の歩みを跡づけなおすという本稿の作業には、東京ベ平連解散後に構成された歴史認識の枠組を脱構築しつつ、そのもとで見えにくくなっていたベトナム反戦運動の多元性を見出しなおすという重要な意味もあるのである。

3 大学闘争の嵐のなかで

1968年から69年にかけての大学闘争は、神戸大学における教官と学生との関係を断絶させた。しかし、神戸大学評議員の要職にあった小島、東京大学での研究生活に入った齊藤は、ともに否応なく神戸大学闘争に関わり続ける。1960年代の運動を担ってきたふたりは、大学闘争をどのように受け止めていたのか。

新しい世代の登場

1967年10月8日の第1次羽田闘争、1968年1月の原子力空母エンタープライズの佐世保入港、同年6月の九州大学ファントム墜落事故の衝撃は、これまで停滞していたベトナム反戦運動をふたたび高揚させた。第1次羽田闘争で山崎博昭（京都大学文学部）が命を落とした直後の1967年10月14日、小島は同僚の小川政恭・陸井四郎、そして東京に転任した水戸巖とともに「ベトナム反戦の目的における連帯の意志を明らかにする」ための「声明」に名を連ねている。

齊藤は、この時期の神戸行動委員会を「昔からのメンバー、新しいメンバー、出たり入ったり。そしてだんだんと成長し続けている」状態にある「まさに生きている」組織と形容し⁽⁵⁵⁾、神戸行動委員会はそれまでの停滞を振り払うかのように街頭行動に力を注いだ。1966年4月、神戸大学経

(54) 同前。

(55) 齊藤威「編集後記」『ベトナム通信』25号、1968年1月。

济学部に入学した西信夫（1947年生）は、大学入学直後に小島の講演を聴いたことをきっかけに、神戸行動委員会に加わった。これまで「ベトナムに平和を！」をシングル・イシューとしてやってきた神戸行動委員会に「沖縄」「安保」の問題を持ち込んできた西は⁽⁵⁶⁾、神戸行動委員会の経験を「1968年」後の世代に伝える唯一の存在となる。また、これまでほぼ単独で行動してきた神戸行動委員会の周辺に新しい反戦グループが続々と生まれ、神戸行動委員会と共同行動をとりはじめた。とくに効果的な行動が阪神間の国鉄・私鉄の主要駅25駅で行う「早朝駅頭ピラ配り」であり、新たなメンバーの多くは、毎回4万枚を撒いたこのピラを受け取ったことをきっかけに行動に参加している⁽⁵⁷⁾。

1968年4月4日のキング牧師暗殺の一報に、神戸行動委員会はただちに追悼集会をもった⁽⁵⁸⁾。国際的な反戦運動との連帯はより強く自覚されるようになり、4月27日の「国際反戦行動日」には、アメリカの徴兵拒否運動と連帯した集会も開いた⁽⁵⁹⁾。4月に、齊藤は東京大学大学院理学研究科の小柴昌俊研究室に流動研究員として入ったが、なお神戸のベトナム反戦運動の中核として多忙な日々を送っていた。とくに阿部知二らが提案した「ベトナム反戦全国行動月間」に呼応して6月15日に神戸で集会を開催するための連絡や交渉に、齊藤は忙殺された。この集会の開催に向けて協力を呼びかける「神戸アピール」を発した17人のなかに、ただひとり20代半ばの齊藤がいた⁽⁶⁰⁾。

6月15日の集会の担い手となったのは、「神戸アピール」に名を連ねる則武保夫・陸井四郎・湯浅光朝・小川政恭・中岡哲郎ら大学教員、そして小島をはじめ、君本昌久・伊勢田史郎・高島洋・直原弘道ら神戸の詩人グループだった。各地で開かれた6月15日の集会のなかで、詩人が積極的に参加したのは神戸だけである。これは、直原ら小島の親しい詩人たちが、朝鮮戦争下の神戸で反戦運動を行い、その経験を砂川闘争や警職法反対闘争、60年安保闘争につなげていったというそれまでの運動経験を反映してのことだった⁽⁶¹⁾。神戸の詩人にとって詩をもって社会に向き合うことは当然のことであり、そのような雰囲気があったからこそ、小島も齊藤も大学の枠組を超えた「市民」のつながりによる運動を追求できたのだ。

250人が集まった6月15日の集会を終えて、齊藤は東京での研究生生活を本格化させた。本郷キャンパスでは、安田講堂前にテント村が生まれ、大学院生が闘争を担っていたが、齊藤は「テント村には行ったけれど、安田講堂には入っていない」という。東大での齊藤は、実験に打ち込んだ⁽⁶²⁾。しかし、決して齊藤が運動に関心なかったというわけではない。神田のカルチュ・ラタンにも、新宿にも行った。かつて領事館前でともに座り込んだ水戸夫妻が事務局となった救援連絡センターも手伝った。けれども、神戸行動委員会を3年近くにわたって背負い続けた齊藤が、東大闘争に深入

(56) 西信夫「学生平和運動グループの連帯を」『ベトナム通信』26号、1968年3月1日。

(57) 前川哲夫「早朝駅頭ピラ配り」同前。

(58) ベトナムに平和を！神戸行動委員会『あなたの創意と行動力を反戦と平和のために』1968年4月。

(59) 同前。

(60) 「神戸アピール」『ベトナム通信』29号、1968年6月1日。

(61) 注(46)に同じ。

(62) とくに実験系の大学院生・研究員にとって、毎日の実験によるデータの積み重ねは、自らの研究を進めるうえでの基本的前提だった。そのため、実験の遂行を不可能とする封鎖に対しては、反対の立場をとる者が圧倒的に多かった。

りすることはなかった。それは東京の運動への反発であったのか、東大闘争が内包していたエリート主義への違和感であったのか。神戸での経験を振り捨てるように実験に打ち込んだ齊藤は、しかし、小島もその渦中にあった神戸大学闘争に否応なく関わりをもつことになる。

神戸大学闘争

神戸大学は、旧帝国大学と同じようにすべての学部に大学院をもつ「A級大学」への発展を目指して、急速に大学の規模を拡大していた。学生募集人員を見ると、1960年の7学部1,205人から、大学闘争が激化する1968年には9学部2,000人に達していた。このような急速な大学の規模拡大による寮をはじめとする大学設備の拡充を求める学生の声の高まりが、大学闘争の一因となった⁽⁶³⁾。

神戸大学の学生運動を掌握してきたのはフロントだったが、東大闘争を目の当たりにして学生運動が高揚した1968年半ばからは、三派全学連の影響力が急速にひろがってきた。住吉寮の光熱費負担問題をきっかけとして大学当局に対する反発が全学にひろがり、1969年2月には、寮問題を政治問題化した三派全学連の主導により教養部が封鎖された。「オール神大」として協調して行動してきた小島ら教官と学生との関係が絶たれた瞬間だった。

神戸大学評議員の要職にあって学生との対話の回路を保とうと献身的な努力を続けた小島も、学生との団交の場の最前線で交渉を続けた。小島の心労を増したのが、教養部ドイツ語教官・松下昇（1936-96年、東京大学独文科卒）の動きだった。松下は、教養部の封鎖直前に「情況への発言」を発して授業・試験の放棄を宣言し、以降全共闘を支持する「造反教官」の代表格として全国にその名をとどろかせることになったのだ⁽⁶⁴⁾。小島は、松下のことについてほとんど書き残していないが、しかし教養部語学系教官のまとめ役としても⁽⁶⁵⁾、東大の同窓生としても、松下の動きに神経を磨り減らしたことは疑いないだろう。

教養部の封鎖が続くなか、これまで神戸行動委員会の事務所としていた小島研究室の使用は不可能になった。この時期、神戸行動委員会の実務を齊藤から引き継いだ西信夫は、教養部の向かいにある学生会館に移って、神戸行動委員会の実務を続けた。経済学部自治会委員長として三派全学連の暴力も、民青のいうところの「秩序」も否定していた西は、1969年3月1日の三派全学連と民青の一触即発の事態を、両者の間にかかる細い陸橋の真ん中に座り込んで防いだ。小島が最後まで交渉相手として望みをつないでいたフロントの学生は、三派全学連の影響力がひろがるなかで、急速に学内での主導権を失っていた。1961年に共産党を離れて以来、フロントが掌握する学生自治会や大学生協と親しく付き合ってきた小島にとって、フロントのメンバーではないが、フロントとともに創り上げてきた神戸大学の学生運動の作風を継承する西の行動は、心強く感じられたかもしれない⁽⁶⁶⁾。

(63) 須崎慎一「神戸大学紛争」神戸大学百年史編集委員会『新制神戸大学史』神戸大学、2010年3月所収。

(64) 筆者が神戸大学に進学した2001年、旧教養部A棟の校舎には「開かずの間」と呼ばれる使用されていない研究室があり、それがかつての松下研究室だった。改装されたA棟に、当時の面影はほとんど残っていない。

(65) 教養部の語学系教官には、松下に同調する教官が多かった。

(66) 西はノンセクトによる「六甲台闘争委員会」の一員として、経済学部の封鎖を実行した。

60年安保闘争後から神戸大学のさまざまな運動を担ってきた齊藤は、この時期の神戸大学闘争をはじめ「1968年」の経験を、「分裂しながら支え合うようだった」と振り返る。東京と神戸を往復する生活のなかで、齊藤もまた、神戸大学闘争に関わらざるを得なくなった。1969年2月26日、理学研究科の修士論文発表会での皆川の発言に不満を抱いた院生の一部が、発言の撤回と謝罪を皆川に求めた⁽⁶⁷⁾。これをきっかけに、皆川の専制的講座運営に不満を抱いていた教官・院生が一斉に皆川に反旗を翻したのである⁽⁶⁸⁾。皆川批判を行ったのは、教官・大学院生にとどまったが⁽⁶⁹⁾、皆川批判をきっかけに理学部の学部生の闘争は全学的な闘争と結びつき、6月に理学部本館は封鎖されるに至った。封鎖に至るまで、学部生の相談役の立場にあった齊藤は、封鎖を回避するよう学部生を説得し続けた。封鎖を強行しようとする学部生に「敵は誰なのか」と問い、「封鎖することを目的や価値にすると、自力で封鎖を解除できなくなる」と説得する齊藤の脳裏には、1964年の生協ストライキの経験が想起されていた。生協従業員労組による生協食堂の封鎖を、赤松と齊藤の話し合いで解除した5年前の経験と比べると、封鎖を目的化することで封鎖の当事者＝学生の退路をも断たせてしまうことが、齊藤には容易に予測できたのだ。

8月8日、神戸大学全学の封鎖が解除された。封鎖解除にあたったのは、教官・職員だった。封鎖中も学生会館で『ベトナム通信』を作り続けた西は、1969年10月、神戸行動委員会の名前を「ベ平連こうべ」に変更して、神戸行動委員会が紡いできたベトナム反戦運動の歴史を受け継いだ。ベ平連こうべに結集したノンセクトの学生のなかに小島や齊藤を直接知るものはいないが、齊藤は西の相談役として、神戸入国管理事務所に収容されている脱走韓国兵・丁勲相（朝鮮戦争で離散した家族が暮らす北朝鮮への渡航を求めて日本に密入国し逮捕・拘留、1971年1月に北朝鮮に出国した）の支援運動を助けた。「入管を包囲せよ」——神戸入国管理事務所周辺の民家に丁勲相支援を訴えるビラを連日配る行動——を西に伝授したのは齊藤だった。党派や組織ではなく「市民」を主体とした運動を行おうとしたところに、齊藤の面目があった。評議員を辞した小島は、教養部改革に着手し、のちに教養部長も務めた。

神戸行動委員会の経験を受け継いだ西、そしてベ平連こうべの人びとは、日本のなかの「内なるアジア」としての在日朝鮮人への差別問題に向き合った⁽⁷⁰⁾。西は「ベトナム反戦に始まり、日本の全矛盾を告発する諸々の社会変革へと突き進んできた」ベ平連運動を「対権力の抵抗」として評価しつつも、「保証された市民的権利を前提」とするベ平連運動が、「市民的権利が十分に保証されず奪われている人々——在日朝鮮人・中国人・被差別部落の人々——」に固有の問題にとって「有意味」な運動をなしえたのかを問い返している⁽⁷¹⁾。小島、齊藤が紡いだ思想は、西ら次の世代が確実に受け止め、より深めていったのである。

(67) 林市雄「物理学科に於ける大学闘争」神大物理同窓会編『神大物理いまむかし』私家版、1999年。

(68) 皆川も、小島と同時期に神戸大学評議員を務めて、全学化する大学闘争の收拾に取り組んだが、原則論の立場から大学側の不明朗な対応を批判してもいた。

(69) 神戸大学理学部物理学教室『皆川問題』に関する物理教官の見解』1969年6月13日。

(70) 拙稿「ベトナム反戦から内なるアジアへ——ベ平連こうべの軌跡」出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社、2015年所収。

(71) 「ベ平連はどこへ？」『週刊アンボこうべ』（神戸アンボ社）75号、1971年9月30日。

おわりに

1971年に京都大学で博士号を取得した齊藤は、東京大学原子核研究所・同宇宙線研究所で研究生活を続けた。「少数者」としての矜持を胸に宇宙線研究で世界的業績を残した齊藤は、定年をまたず2000年に大学を去った。長く助手のままであった齊藤が助教授に昇任したのは、大学を去る直前だった。2011年の福島第一原子力発電所の事故以降は、宇宙線の観測で培った技術を土壌や食料品の放射能測定に生かし、被災地における放射能の影響の軽減をはかるなど、行動する科学者として生きている。



写真1

小島の自宅書斎での齊藤夫妻
(1970年頃、小島輝正撮影、齊藤威氏提供)

齊藤は、自身の1960年代の経験を「過去のこと、忘れたこと」と語り、齊藤がほぼ毎号編集した『ベトナム通信』（全42号、1965-69年）もたくさんのピラも、齊藤の手元にはまったく残っていない。学生時代の写真すらも、齊藤はほとんど処分してしまった。しかし、小島の最期を看取った小島の盟友・直原弘道が、「(神戸)行動委員会といえば齊藤だな」と語るように、誰もが齊藤の神戸行動委員会への献身を記憶に刻んでいる。

多くを語らない齊藤が、今も心の奥底に秘めている運動への情熱と確信を筆者が感じ取ったのは、2015年6月21日日曜日、かつての神戸アメリカ領事館に隣接する三宮・東遊園地から出発した集団的自衛権行使容認反対デモの時だった。かつてのべ平連こうべの旗⁽⁷²⁾を掲げてデモに参加するにあたって、呼びかけ人の西がデモの参加者を50人と予測したのに対し、齊藤は「200人集まるでしょう。そうでなければ、40年前の意味がありません」とメールで伝えてきたのだ。デモを終えて齊藤、西と合流し、130人が集まったことを確認した時の喜びは、筆者にとって忘れがたい経験となった。

とはいえ、西と齊藤の現在の運動への眼差しは異なる。「We Shall Overcome」で済むものかと思った」齊藤は、西が希望をかけるSEALDsに対しても⁽⁷³⁾、一定の距離感をもっている。ここには、1960年代のさまざまな社会運動を手弁当で担い続けてきたゆえの齊藤の厳しさが垣間見える。大学闘争後、文学活動と教養部改革に心血を注いだ小島は、定年退官後間もない1987年に癌のため急逝した。小島の葬儀には、西をはじめ多くの神戸大学の卒業生・教官、そして多くの詩人たち

(72) 旗が見つかった経緯については、「怒りの行進 40年ぶりべ平連の旗」(『毎日新聞』2015年6月13日夕刊)を参照。

(73) 「灯は消えない」『毎日新聞』2016年4月9日夕刊。

が参列したが、神戸大学は教養部長を務めた小島の蔵書の受け入れを拒み、小島の蔵書は散逸してしまった。大学闘争のさなかに提起された小島らによる教養部改革案は、1993年4月に教養部が改組されて国際文化学部が発足したことでようやく実現に至った。2017年4月に国際人間科学部に改組予定の現・国際文化学部の教員の多くが、小島がかつてここで教鞭をとったことを知らない。

高度経済成長のもとでの原水爆禁止運動、そしてベトナム反戦運動に枠づけられた1960年代の歴史像を浮かびあがらせる作業は、緒についたばかりだ。本稿で見てきたように、「1968年」に至る社会運動を担った人びとは、「1968年」に立ち上がった若者を支え、そして「1968年」以降もそれぞれの場で社会に向き合った。無数の小島、無数の齊藤が今もあちこちに生きている。無数の経験の向こうに、半世紀前の多様な経験が新たな歴史像を結ぶだろう。いま「1968年」を問い直すならば、無数の経験に耳を澄ませ、個人の生に刻印された「1968年」の痕跡に向き合いながら、「1968年」を問い直す意味を、ひとりひとり顧みねばなるまい。

(くろかわ・いおり 神戸大学国際文化学研究科協力研究員)